

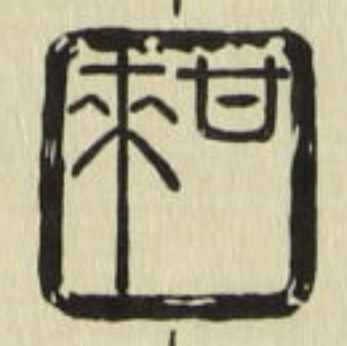




こゝろりり 宗元と尾孫とあるとよめ
 家世の人あはし 和初のしほふか
 せぬ人といひ日よ 後すらんわへ
 と月澄もるもふし 若平の清玉の徳
 今や左平の初よ 浴もる 湯あつきの
 時やしらりさしを 彼来てよむる 華衣
 るこお舟よ梅 けいふまのさか

白おちまの若きよめいふふふふふふふ
 じつと信ふよのいふふふふふふふふ
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちん
 俗説と辨し ちんちんちんちんちんちん
 してこゝろりりりりりりりりりりりり
 才人あつきの若きよめいふふふふふ

又三平しとらんたの兒ふ葉の若く歳とらんし
 こつと三人も下又腹と教へてね坂へいこと
 祝ねんよおん屋の人の知るへりしとを
 忍んてこよこいり道い測よあもるくと
 けらちよるす



李探文選序

柗錦亭文櫻

室家のとり免の御東小菊の佛の如く
 文選成えしと家家け持絆とと御人の
 けあにのよきよよ中なるの若山に十名の星
 おちれく満腹の文章採録そのゆり文櫻と
 しの文探とて四字の文章に光るよを多く
 三十餘年其をたてし勢と文花も五日の如
 み花もよみお糸の十日の雨もたけりよ

太平とて河出を内んや物其を平れ海も遊る
 人多しやに武都の柳塘の六味はあつて女
 世活棧や付く一より我神凡の玉に表はるる
 おのこ作りとてさう是と和すさう一より王予と彼
 蓮社もあつては六とを計る文選の二子と舞す
 さらまて二人はあつて其師を名にあらう一は漢や
 兄びる予すし年の若ふはよりて海原とてりて
 官職も予す祝の司ふは其口を案とてあつてしよ
 その草稿のりよとてりてしよは露露將西乃具と

化とんとす爰もあつてしよは漢よとてりて
 えとて世説新語とては其師を名にあらう一は漢や
 文選の序に毎凡文とつねはるの歌あつて一書と
 して聚れとて又其師を名にあらうかの文選文探乃
 赴と各々の題の部とつらう其類くともあつ
 ちとて文とてしよの古法とてりてしよは今に
 又選より果類とてりてきん一篇すしよは漢新とてり
 文選乃名に其師を名にあらうしよは二子と
 又稿りよとてりて其師を名にあらうしよは二子と

ありては經書之大業といふ不朽之書なり
 稱す其解の字ありて是れ一風月を莫学文雅
 汎流せしめ其文致もて委るはしきものありて
 角古の増くおく習口本のもを國子海たりて
 玉子の文辯子なるも(少り)は中よて如後子
 通して其意の必ふ之卒者也といひて難ぶ小
 手尔遠波とてその方々風出の今も者致さる
 誠子文解の君子(國)あるは又其備かりて

何事やふり又孝くして六儒公の二典を法りて
 心史実録ある路波源語枕冊すして世文の
 枝打たきしそしととりあき(誠)判ひくまより
 たるり下ぶぬのいへくもあはぬ根をたぬ路り
 教しるめ七虚之実也二用よとるも用此の法山の
 蛇の身在るある竹園うかりありはれめさする
 こつちやらんはむや桃李よの空はといははる
 山はむ何たりいふや梅は文を好ませるも秋

ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 才をてとつてその音のまじり物も心はまじりて
 才をてとつてその音のまじり物も心はまじりて
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 ちよとせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ

心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ
 心とせしむし故のあすはあつて人の心を給ふ

氣の牙子破る色米虫此種とよやん
と云二子、こ現、かうかうのふらふら
んくのと遊むは、こまのふらふら
様本よりて子載のふらふら、ふらふら
同うやる様あ、ん、と、あると力より
李下ふらふら、こ子者の志は、あ、
そ色と探り、こ水と探り、す法と探り、功
つら、こち子文協の号、成、と、

李撰文選とあり、つら、つら、
う、こ、乃、く、の、お、あ、こ、て、
此、こ、こ、お、こ、れ、ね、こ、あ、こ、
こ、あ、こ、あ、こ、あ、こ、あ、こ、あ、
山、部、こ、あ、こ、あ、こ、あ、こ、あ、
こ、あ、こ、あ、こ、あ、こ、あ、こ、あ、
西、山、こ、あ、こ、あ、こ、あ、こ、あ、
こ、あ、こ、あ、こ、あ、こ、あ、こ、あ、

しと去るそ去其通と通あうはると又知
るり次と通と書り文のてふとてふ也
あつりて序とす也云

天曆十一年己年仲秋良辰



存撰文選目錄

卷之一

古、採、辭

論、語、計、辭

一、以、辭

三、反、論

龍、論

指、歲

卷之二

般、在、辭

二、風、賦

古、味

桃、溪

支、梅

古、味

飛、溪

交、梅

古、味

桃、溪

喚，歲

送六味為之之甚野序

送六味為之之甚野序

送桃溪子序

與友梅子文

亦不二中編

卷，每

求二品之碎

石成於日，好

是之之

交梅

桃溪

支梅

六味

交梅

亦不

六味

桃溪

交梅

風，賦

讀此賦

三人一編，好

音，碎

詩，好，編

之，好，賦

十六，求，對

整，編

六味，為，歲

時，好，說

交梅

六味

桃溪

六味

亦不

交梅

六味

桃溪

交梅

桃溪

交櫻

六味

交櫻

六味

交櫻

六味

交櫻

六味

交櫻

六味

交櫻

記事

桃溪
交櫻

吾輩六味翁ノ文ヲ慕テ年頃筆硯ニ遊フニ賢不肖ノ文章既ニ
 二百余編ニ及フ爰ニ於テ往シ寅ノ年カ梓行ノ一ヲ六翁ニ申セハ
 翁モ元来此志ナキニシモアラス何レノ年ニカ竹尾ナルモ此事ヲ企シ
 ニ早クモ地下ニ至リ其後門調ノ人稀ナルニ今ヤニ子ノ大志アル社
 老ノ身ノ幸ナレト彼畢鉢羅ニ三人篋リテ密ニ校訂スルヲ其子
 ノ白明子サヘ是ヲ知ラス其妻ハカリハ鑑ノ穴ヨリ入テ翁ノ起臥
 ヲ助ケヌルニ粗其選ノ意ヲ知レルニ也物ハ隠レルヨリアラ
 ハレタラシ社トイヘ偏ニアスレタルヨリ隠レテ又アラハレタルモ面白カラシ
 上テ斯ハ秘藏シケル也サルカ中ニ翁ハ例ノ病カチニテ物モ六借氣
 ナレハ適心ニメナル昼ニ夜ニ彼是ノ品ヲ定ルニ一日ノ駒月ノ暈モ止ラテ

卯ノ年モイニ夕成ラズ辰ノ春ハ此翁モ泉下ノ客トナリケルニソ實ニ子ハ
 筆ヲ毛斷ヘキ思ヲナシ又然ハアレト生前契リシコトヲ言フ喰ハ輩ナラヤ
 ト已カ不敏ヲ忘レテ此志ヲ繼ニ翁ノ雌黃ニモレタル物モアレハ是非イソレ
 トカ定カク待レトヨシヤ世中ノ浮草ナレハ強テ耻ヘキモアラスト既ニ
 木ニ鏤ニトスルニ楊氏カ恐レシ四知モ去ルコトニテ四明子ノ耳トクモ此事ヲ
 止メテ多クツイツ頃モ人智己ノ人々遺文ヲ不朽ニナスノ志アリテ文庫
 搜シテ乞ハレシコトアリ其志ノ切ナル吾身ニ於テ謝スヘキノ詞ナケレト
 翁ハ生涯名利ヲイトヒテ隱逸ヲム子トシケルニ蟻ノスサミノ書捨ノ世ニ
 出テシモ本意ヲ下固ク辞シテ一ツノ文塚ニ封シヌ今此事モ思ヒトナリ
 テヨト頻ニ申サレケレ氏イカハセン彼在世ノ密劔ヲヨシサスハ罪ハ吾ニ社蒙
 ルケレト例ノ無ク別ニ四明ノ意ヲソムキテ先卅余章梓ニ彫リテ亡翁ノ
 墳前ニ備ヘ季氏カ志ヲ追フシカナリ

李撰文選卷之一目錄

- | | | |
|---|-------|----|
| 一 | 中々蝶ノ辭 | 古味 |
| 二 | 編綴汁ノ辭 | 桃溪 |
| 三 | 灰吹ノ辭 | 支極 |
| 四 | 養ノ論 | 古味 |
| 五 | 融ノ編 | 森溪 |
| 六 | 猶ノ歲 | 交極 |

李探文選卷之一

一 魯及蝶辭

六味

子夏及よ、莊子とあるところ、なまは我すして、莊子、莊子
 あり、莊子と、又、侯也、さき、は、は、官名と、後、けて、糖、り、米
 し、め、る、お、や、か、へ、よ、連、覺、一、枝、と、い、け、て、目、を、視、る、也、る
 あり、さ、る、と、い、つ、道、の、ま、よ、う、倦、ら、ん、黃、蝶、を、し、り、あ、り、て
 子、や、ら、る、を、蘇、也、よ、と、ぬ、城、よ、あ、る、す、へ、と、風、情、い、と、ん、り、る
 な、し、情、其、あ、と、か、ん、を、情、と、あ、り、て、雨、と、飲、す、る、の、佳、趣、を
 け、り、と、思、ふ、よ、さ、さ、や、莊、周、り、及、よ、蝶、と、あり、は、然、り、て
 周、り、蝶、あ、る、や、蝶、の、周、り、や、し、か、け、る、と、か、ん、道、を、し、蝶、と

吾邦人の母もよとていふあるよ下へぬのくまは
何かがんの一杯よらなるとしてそれより

○夏も暑まゝ一里のきけある暖き朝酒の具も固味
と笑ふまは梅のおりむさぞ遊子のいぢらありはる
あゝ風もいぢていぢていぢて親のいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
いぢと飽まてよらくいぢ暖よあて果あ

○昔林農氏と安へいぢて百の存とあて
一日よ七十の毒あつとやほの民のいぢらぬいぢらぬ
其いぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
いぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
いぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
いぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ

の世と知ぬまゝいぢらぬ人あつや

○世よ好惡の二つありて飲食いまして人の好む物と
おの世に好まぬこれ好むものと貴い好まぬものと
憎むこれ能毒の世はよあつていぢらぬいぢらぬいぢらぬ
さほよの世も好むいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
命よかつていぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
さういぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ

○ふ百中はむらりいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
遊ばしてそ独よあつらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
○あゝ人友のいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
あゝ素美として遊ばそいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ
いぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬいぢらぬ

かり部一は其日をあやにくよは地の一いつくあうで
 心すう酒のこよは酸つおらうあう海は地よいこ
 眼すまはよあはる風情あり一うはま毒あがて其
 毒ありとあはるうは毒とそくまらす一入念を
 せましく夜ゆるは中しくは醒ゆるよけくち
 白しよるにかうくまを赤いんよすかうゆり
 とぞ致毒毒一死といこまうせ一其今といれ
 ○とあまかくたれ又母よすくま乃子あらん子牙
 よあまに毒を師又あらん
 ○はちこは輪切大根の妹背をあう一はれは七魂
 のも海よあはる一とくよは人恨んであう人

此乳味乃高ま一たを例のち施あまは也
 ○是非いつまよりあらん取捨りのれようあらん書
 して笑おおあさむ

三 灰吹、辞

交梅

む一虞舜の君は清物すまは漢海の竹と依りて
 灰吹く一あまよりあまのち傳へてうま世のさうれ所
 灰吹く落掃書のぬ一ち新拍のまをさう一とや
 さあはまのハ天帝の法にくまうけてうたう海を
 勤く一まそあま一は色かの王教う破れい一殊が
 とりてたくとまはまかあ物の一うとまはる其故

花をたんとぬつゝこの工に出でて暮れ帰るもれはあや
 りとあはれすけはようゝぬ女の調度とそあはれり
 かく其素生もあはれとて用をあすはるも一也と
 河東の皇子の夜ありしや罷りて配所の内なる
 中納言を執事さなりしかきう兼ありしと報り
 してその子のあはれさよ志うち虎御実御軍うし
 機嫌のやりとあはれとてあはれは武蔵のさき
 無常れをうりしはあはれとてあはれはあはれ
 いうるすくせよやあはれん短歌の水鏡のうたて
 すむるよあはれとあはれとてあはれはあはれ
 するたんはあはれとてあはれのあはれはあはれ
 するたんはあはれとてあはれのあはれはあはれ

経よあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ
 示しあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ
 りてあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ
 うたてあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ
 麻よあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ
 柳もあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ
 其塩也つゝあはれと十九文張りのあはれはあはれ
 引らしてあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ
 より佛の顔もあはれとてあはれのあはれはあはれ
 かくつゝあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ
 めつゝあはれとてあはれとてあはれのあはれはあはれ

武の叙れしむるは

曰 後論

六味

昔より後とてさうもたしむるは
よあしす禁の面もさしよの也抑後の改とらんよ
礼記の六後より黄帝の花骨孔子れ周と南無り
胡蝶をさる埋座とらんよ
五十の六欲の治とらんよ
とるよたしむるは
蘇抹よりヤグて治師の毎ちよて吉後よとらん
あしむるは

お家柄指すらんよ
お勝よお後とらんよ
後をたす警致書してらんよ
めくる後とらんよ
けらる後の世よ
述るよ
魚をさし人いぬ
事よく
めらさし
り好よ
張りよ

あり、榮花らのまゝ、いゝなりあるに通へば、
大和のりりも好む、
ぬを拍りあす、
人のの笑は、
やおとほ、
やちあ、
よる、
人、
り、
あ

る、
それ、
さ、
あ、
あ、
あ、
あ、
あ

龜論

桃溪

お、
法師、
人

出とちめすと例のねよあうけて火災と道こしむるあ
つしう一災前表とさとすしう一夜の初よあつまり
鳴く時身目より小女島と称すまは凶妻とて去り
あつちそれ中一の風流あらん家は朝までよく訓せ
ある一の世とちあはお徳の節義よやされお訓の
福よあうてはあへては一方あうりしては作られ
板の心まはるまゝひかぬれ如く通して板よ血のつく
とかりあまはひきさうしうひかぬれ如く危姫茶話
なるうた又竹の笠は入られ反折してあうりかた
よと立ちあしはれ自在あると積りてはと訓せ
とあうりや其理をあらうしうまはるしう融の深山

よ融せの中よすむと天とあつけなるは身と合りし
て天と来しまんと思へるは後よは眼坂あまの陰れ霜
と成て愁ぬる月よはせると懐むしうあつたすしう
戯論もかまひすくはあま懐むしうあつたすしう
しあつたはあめさよ融をかては具せしとんは浮ひ
またあつち若かなは本のめしあやよ海融のそこあつ
しあつちとあつちうしうはく人のられたのよとあつち
あつちよ川あつちあつちまづ藤葉毛よあがらんあつち
あつちのねとこしうしよ品字まはるは暖ありしうし
あつちあつち鼎のあつちあつちあつちあつちあつち
あつちよ入色は陰懐むしうあつちあつちあつちあつち

海に遊んで今の島に居る是の人の事をいふは出雲
 して者とあるは流をなよ廓然大悟すん只如む
 らくち日海にようすづけは人を海海と云ふるも
 祢と云ふ安んずさうは龍の身在るもさうやまひ
 してちも亦人さうさむいふはとあめへあひあひ
 りあひさむは龍の論とていふさうなり

六 猫箴

交搦

歎する物と云ふは猫と云ふはあはれかむらせ
 相と考ふるよあまをちらう仲の傾城なり一は格子
 ささけ祢ずあまの身とそんて料理場乃海をに

目つきの者は癖まゝと天帝より難一と云と小判
 つあて交けて今生かこのあまのれよはせさうりたかり
 方はとよとあま一人の膝枕よ馴て火爐の縁に候え
 昔志すすやされはちらうの縁よむりして大和の虎
 とをかく猫といふまゝ如流はまゝさしりのあまへ
 極めて氣とあまの氣とのむ乃略強よそ祢こと如判
 ささう一抱きりの人があひりり祢を好むといひ
 てあまのまゝにいふまゝ一扱了そ牡丹のさよ眠る日も
 心は嫌よまゝさうこれとん花よあはれとあ人のさうあ
 一切を少して富田入の敷術の奥妙よは傳へ傳ふ
 子性やうらうらうと女はのまゝさうさうりあしつゝ女にの

この世に生るるもの及びたるもの、其の味とくちりぬも保の内意
よいては命をぬよか一つれて存まらり勅勅も君臣の
ことごとおのりや彼者も成りしる様のことりよ破の法
つけらるる法に納まを猫すこと入つらりされいぞ其れ
肉のむらうた某肉に多くあつらんよ物もよ其勇とぬる
よありてハ瓜のするどあるものハ物質の变化化し
あやしく方の物さるハ捕獲と之相とあつるも果小
長貴一日の暖あまハ瞳子よ其時の変化相と志あり
針と成り瓜と成りあつらんよ其の世れ中とらとす
よとあつて其月の勝あつらんよ其の志もやむ所也
とりやさい事あまれ麻よまらりて不破の関をの板

底よりうりれて果ハのハ猫のたつらりとあり赤も其の頭
の法法も奥山の杯にこまこれ鳴も其は致りて経て其の
好いありらん然とすものハ瓶裡とのことえらる小
あやりのたけ物長よハ此をれも交りてらんけきは
若く乃友よものこといふことけありの戒めを法也
其交赤猫にもく化をそのよいひあされて人のよよ
そぞろくもいひつたよハ之縁師の店よこらりてなま
有とらうあまもさるくも乳の教をかそへてハつ又たさ
調度よりてあされる死して其悦ひもやいふたん
之色あまれ上の色をとりく其色も早に其のよそ
く是らるハ猫をかきて志かうして其猫を知らる

本草綱目 卷一 十一

そのいふまゝありたるは其性の利鈍とこそいふまゝの
 色は文よりの海をいふと後こゝれ出づとも念の花梅と
 いふのありてあきらりよちやこゝとあはれゆと敬せ
 つまはかあすちふふ海よりなりれいでそよ十二支
 の別とさつせし二十六の仲間とあはれしるは利と
 いふふんふんり押す程れ海しむるふりかくいふど
 涅槃の書よははしあつるらあ十二支のいふあを
 恥しあらんさいしき佛の足跡さうもあつて唱あつ
 ニヤニと唱えたるニヤあすよかつてこゝとあつていふ
 のまめせいふもはつと念仏とも兼修とも唱へるあ
 いふあつたよまあつるあつたや能中子子子子子子子

のあつていふより文殊の降去よあつていふかへてそ
 ろもあつて世をかあつた者業よ能んといふあつた
 れあつたあつたあつた味あつたあつたあつたあつた
 こつとあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 文章あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
 さんよりあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

- 一 ちかりこゝと火燈の油よあつていふ三舟のあつたあつた
- 一 ちかりこゝと火燈の油よあつていふ三舟のあつたあつた
- 一 ちかりこゝと火燈の油よあつていふ三舟のあつたあつた
- 一 ちかりこゝと火燈の油よあつていふ三舟のあつたあつた

心もぬきさしなくして妬みぢる海々の果るを
あはれむくはる事

右の條の指の沖おうけぬくつかぬことや
まもりけしきの上なり

李探文選卷之一終



